

同志社女子大学生生活科学 Vol. 46, 77～81 (2012)

《資 料》

時代を漂流する青年のころ

——「友部正人」が構成する物語世界——

Adolescents' Spirit is Wandering with a Time :
The narrative world constructed by "Masato TOMOBE"諸 井 克 英
(Katsuhide MOROI)

はじめに

Frith (1983) によれば、ロックの「衝撃力」における「歌詞」の役割は懐疑的であり、「決定的な変数は、サウンドでありリズム」である。同様に、増田 (2006) も「歌詞」のみが「正典」として「衝撃力」をもつという仮定に一方的に依存しているという点で「歌詞」分析に消極的である。しかしながら、ここで取りあげる「友部正人」が長年に亘って表出している歌は、まさに音楽分析の有意な方法としての歌詞分析の妥当性を証明してくれる。つまり、友部は、「歌詞」を「図 (figure)」とし「音的要素」を「地 (ground)」にすることを企図し、日常風景の詩的構成によって聴き手に心象風景を再構成させることに成功したのである。

友部 ('50 年生まれ) は、'72 年にアルバム『大阪へやって来た』で公式デビューした (<http://www.5a.biglobe.ne.jp/hanao/001-tomobe/profile2.html>)。その後、多くのアルバムを制作するとともに (『クレーン』(TM-015, 2010) までオリジナル・アルバムで 21 作)、'77 年に詩集『おっとせいは中央線に乗って』(思潮社) を公刊して以来、現在までに 8 冊の詩集を刊行している (『退屈は素敵』思潮社 2010)。つまり、これは、「たった一歳半しか変わらない」フォーク・シンガー「高田渡 ('49～'05 年)」から学んだ「詩」と「歌詞」の無境界性によっている (「詩人が無言で反芻したものを、歌い手が声に出してまた反芻する」、「そうして粉々になった言葉は、もう誰のものでもない」、「しいていえばそれは、その言葉を口にした人のものだ」(友部, 2007 a))。たとえば、若くして世を去った詩人「中原中也 ('07～'37

年)」の「詩」は「音楽のようで」あり、彼は「詩の朗読のパイオニアだった」(友部, 2007 b) と、友部自身が構成する「歌詞」世界との同型性が強調される。

友部は、東京で生まれたが、小学校入学以来、各地を転々とした生活を送った。これは彼にとって眼前の風景を心の中で言葉を駆使し再構成する特異な感性を磨く基礎を形成したといえる。高校時代<名古屋・熱田高校>から Bob Dylan の影響を受け自作の歌を歌い始め、高校卒業後には今でいうストリート・ミュージシャンとなり、'70 年に大阪に放浪し当時の先端であった若者文化の渦に入り込んだ。その後、'71 年に東京に移り本格的な音楽活動 (加えて詩集創作活動) を営むことになる。

揺らぐころ

Erikson (1959) によれば、青年期は同一性拡散によって特徴づけられる。子どもから大人への過渡期である青年期には一過的に自己喪失が経験される。

友部のデビュー作品「大阪へやって来た」(A) では、次の 2 つの相克する時代要素を背景として青年の同一性拡散が描かれる。①日本の高度成長の関西版発点としての「大阪万博」('70 年 3 月 15 日～9 月 13 日) と、②'60 年代末からの社会体制に対する若者の反抗=「大学闘争」の挫折を象徴する連合赤軍による「あさま山荘事件」('72 年 2 月 19 日～28 日)。とりわけ、「大阪万博」の開催は「高度成長の成果たる一人ひとりの豊かさ」を「自己確認させる場所」として機能し (吉見, 2011)、結果として社会に対する若者の対抗を挫折に至らせることになる。

「南へ下る道路には 避難民があふれ僕は 10 トントラックで 大阪へやって来た」, 「御堂筋はレース場で 心斎橋はこの世の人だまり」, 「スポーツ新聞はいつも

同志社女子大学生生活科学部

阪神のことばかりかきたてている」,「長髪を風になびかせる 自称ヒッピーたち」と、当時の大阪の喧噪風景が描写される。その眼前の風景は、「一年中わびしくてやりきれない町 それが大阪」と結論される。

その喧噪風景と連動させながら、自分自身が Erikson (1959) のいう同一性拡散状況にあることが次のように吐露される。「その中を真夜中にうろつく僕には今 何の地位も将来も 約束されてはいない」(時間展望対時間拡散),「いつのまにか手を取り合うだけの エゴイズムとすり変ってしまうんだ」(親密さ対孤立),「いつまでたたって落ちつくあてもなく まるでいくじがないまま まだフラフラしている」(達成の期待対労働麻痺)。この拡散する不安定な気持ちは,「(「ラリ」っていた)あの娘に赤ちゃんが生れる」という情報によりいったんは収束する。つまり、人と人の関係性の確認により同一性拡散の現状がいったん肯定されるのだ。

「夜よ、明けるな」(D)では、夜という神秘的な風景にこの青年期が託される。あたかも「君」と「ぼく」の二者関係の顛末を装いながら、青年期から大人へと変貌することの不安が描かれる(「だが、君は帰って来ない夜道をぼくは帰って来たのに君は帰って来ない」)。大人社会に移行した「君」を「夜の物干し台にたたずんでいる」「ぼく」は、「いいかげんな言葉」に満ちた虚構の世界(=「大人社会」)よりも、「海の底で揺れる美しい藻」のように「君のために ぼくは静かにたたずんでいる」のである。Erikson (1959) がいうモラトリアムを脱しようとする「君」を羨望しながらも、「青年」という現状に滞留しようとする「ぼく」の対比である。

状況の観察者

’70年代初頭に、それまでの学生運動の衰退を契機に武装軍事闘争による権力打倒を目的とした「連合赤軍」組織が結成される。この集団は、結局追い詰められ北関東の山岳地帯を転々とする中で某企業の保養所「あさま山荘」を占拠し管理人女性を人質にした。これが「あさま山荘事件」である(’72年2月19日～28日)。警察が強行突入するまでの長時間に亘ってNHK・民放によるテレビ生中継が行われ、平均総視聴率50%を超えた。この事件後、「連合赤軍」内部での「総括リンチ」による死者が12名もいたことも発覚し、’70年までは若者の反権力運動にどちらかといえば好意的(許容的)であった世間のイメージは一気に否定的方向に転化した(この「事件」の歴史的発生過程については小熊(2009: 500-673頁)が、政治的力学と当事者たちの内面的変容を相關させながら詳細な分析を加えている)。

このいわば「国民的事件」を取り扱ったのが「乾杯」(B)である。友部は、「あさま山荘事件」がテレビ中継されている街頭風景の中で(「電気屋の前に30人ぐらいの人だかり 割り込んでほくもその中に」,「連合赤軍5人逮捕 泰子さんは無事救出されました」),一般の人々に「連合赤軍」に対する否定的態度の発露を目撃する(「やり場のなかったヒューマニズムが 今やっとな電気屋の店先で花開く」,「死んだ警官が気の毒です 犯人は人間じゃありませんって」)。

ところが、この街頭風景の観察者である友部には、そのような否定的態度は喚起されない。つまり、「どうして言えるんだい やつらが狂暴だって」と、後述するメディア・バイアスを直感する。もちろん、彼はこの事件の当事者の「狂暴」さを否定しているのではなく、その「狂暴」さの内面に潜む「連合赤軍」の「本質的弱さ」(細見, 2005)を友部は見抜く。しかしながら、彼はこの「連合赤軍」に組するのではなく、結局のところ友部は状況の観察者にすぎない自分を受容するしかない(「結局その日の終わりとりのこされたのは 朝から晩までポカーンと口を開けて テレビを見ていたほくぐらいのもの」)。つまり、社会と自分の不確定な関係性に彷徨っている自分自身の姿に「乾杯」するしかないのだ(「乾杯! 取り残されたほくに 乾杯! 忘れてしまうしかないその日の終わりに 乾杯! 身もと引き受け人のないほくの悲しみに」)。

ところで、人の行動はその行動が起きた時の状況とその当事者が抱える性格や態度などの個人的傾性の関数である。Jones & Nisbett (1971)によれば、人の行動を日常的に説明する際に「行為者-観察者の差異」が生じる。つまり、その行動の当事者である行為者は自分の行動を状況のせいにしがちであるのに対して、当事者がとる行動の観察者は行為者の個人的傾性が原因であると見なす傾向がある。

友部が「乾杯」で問題とした「メディア・バイアス」は、「行為者-観察者の差異」に由来する。「あさま山荘事件」の目撃者(=観察者)は明らかに「連合赤軍」を行為者として認知している。学生運動隆盛時にはそれを取り締まる側(機動隊)を行為者としてテレビ画像で作り出していたのだ。このように、われわれは特定事象をどの視点から観察するかによって異なる解釈に陥る可能性がある。この「乾杯」では、この心理的メカニズムが友部によって見透かされるとともに、状況から自由になっている友部の孤独が浮き彫りにされる。

こころの奥底へ

孤独感とは、社会的相互作用についての願望水準と達成水準とのくいちがいの認知によって生じる不快経験である（諸井，1995）。その人が現在営んでいる社会的関係の状態が、その人が望んでいる状態を下まわるほど、孤独感が強くなる。たとえば、その人の社会的関係が客観的には希薄なものであっても、その人が対人的接触を望んでいなければ、孤独感は生じない。また、社会的相互作用に関する達成水準が低い状態を意味する社会的孤立は、両水準のくいちがいに由来する孤独感と明確に区別すべき概念である。

「はじめはくはひとりだった」（C）では、「孤立」から「孤独」への転化の様子が描かれる。少年は、幼少の頃には周囲とのコミュニケーションがなく（「話しかけるのもはくならば それに答えるのもはくだった」）、自然との触れ合いだけである（「海には人間がだあれもいなかった」，「田んぼの中で見つけたカエルの卵が はくに知ることの恐さをおしえてくれた」）。さらに、深刻なことに親密であるべき親との内面的交流もない（「それはおやじもおふくろも知らないはくだった」）。この孤立状態がこの少年にもたらしたのは「たったひとりであることの幸福感」である。しかしながら、彼は突然孤独感に陥る。「ある日」「素敵なことばを見つけ」「はじめてさびしさを知った」のである。

先述の孤独感に関するくいちがい理論によって解釈すれば、この少年はたとえば「友だち」という「ことば」の習得（＝関係経験）をきっかけに社会的関係についての願望が生じたのだ。それまでは「自分ひとり（＝孤立状態）」で満足していたのに現実水準と願望水準の乖離が「さびしさ」をもたらしたのである。

この少年の初期状態の描写は、いわゆる自閉症障害を想起させる。この障害の基準のうち（American Psychiatric Association, 2000）、「共感性や感情の表出が乏しかったり、同年齢の児童と遊べない」、「固執行動、物や場所あるいは状況などに強く執着する」にあてはまる様子が描かれる。少年による他者世界の経験は、この想起を打ち破る。しかしながら、この物語は、この少年が対人関係の「豊かさ」の扉を開いたことを祝福するのではなく、孤独という、「自己と対人社会」との葛藤の出発点にあることを暗示させることによって友部自身の内的彷徨を重ね合わせるのだ。「言葉」は、「人に理解するためのものなのに、人を分断していく」ものでもある（友部・長谷川，1991）。

おわりに

冒頭に述べたように、友部が表出する歌は、言葉の展開に重点をおいた独特の世界を聴き手に再構成させる。友部自身、「詩」と「歌詞」の間に境界を設けていない（「はくは言葉っていうのはぜんぶ歌だと思っていたし、歌イコール詩だと思ってて、まあロックだと思っていたし」（友部・田口，2003））。さらに、ギタリストの仲井戸も「友部正人が描き出す風景の“ことば”そのものがすぐれたポエム」（仲井戸，2003）であり、「そのポエムが彼独特のメロディにのり、彼ならではのギターのつま弾き、ハーブの音色、そしてあの声で色取られた一つの“唄”と友部の独自性を解き明かす。他方で、友部は、「言葉の力」の純粋な抽出の試みとして音楽家による自作詩の朗読会（「Live! no media」）を'00年以来続けている。

友部の世界は、言葉の力を駆使することによって構築される。彼が意図する歌の世界は、高校卒業後に関西への彷徨を動機づける原因ともなった高石友也や岡林信康に象徴される音楽運動（いわゆる「関西フォーク」（鈴木，1987））のような既存社会への対抗に根ざしたメッセージ・ソングに彩られたものではない。他方で、青年による反権力運動の挫折後に生じた音楽的流れであるいわゆる「4 畳半フォーク」（＝「私生活空間への埋没」（諸井，2006））にも友部は包摂されない。

友部は、一見したところでは私生活体験を歌に託しながら、決して私生活空間への埋没をはからない。つまり、小室（2003）が指摘するように「極めて個人的な日常からしか生まれてきようがない」（小室，2003）のに、絶えずそのおりの時代状況を歌詞に織り込んでいく。しかしながら、時代に向けたメッセージを発するのではなく、居場所はあくまでも「個人的な日常」なのだ。つまり、「抗議とメルヘンのふたつを同時に生きる感受性の幅が、いまでも彼の表現の構造をつくっているのだ」（福岡，2003）。これは、先述したように幼少の頃から各地を転々としたが、少年期から青年期中盤までを名古屋で過ごしたことの影響でもある（「十二歳から十九歳までを名古屋ですごした」（友部，1992））。友部はその名古屋を次のように懐古する。「名古屋という地表には、いつも水蒸気が薄くたれこめているのだが、それ以上濃くも薄くもならない」（友部，1992）。つまり、名古屋の土地柄を「不毛」というよりも「変わらない」場所として特徴づける。彼にとっては、「ただただ、だだ広い場所」だったのだ。このような空間の漠然とした広がりを経験が先述した'70年代前後の喧噪の中で心や実際

の行動上の彷徨を動機づけることになる。

’80年代までのわが国の歌謡世界を分析した松本(1981)は、わが国の歌の特徴として、「都市は人間を自由にする」という近代幻想に憑かれながらも、「その裏側には故郷喪失の病いがはりついていた」と総括した。その点で、友部が描く世界は「都市=故郷」という構図が曖昧である。これは、友部が懐古する名古屋の地理-文化的特性と関連するだろう。友部にとっての日常は境界的にしきられているわけではなく漠然とした広がりを持ち、それが時代への明確な対抗や「私生活空間への埋没」のいずれにも偏らない独特の友部的世界を作り出していく。この彼に抱かれた無境界性感覚は、’96年からNew Yorkにも部屋をもち日本との往復をしながらも維持される。たとえば、友部は、「Speak Japanese, American」(E)では、日本では外国人であれ日本人であれ日本語を話すべきだと主張する。グローバリズム化の風潮に伴う「日本で電車に乗ったら英会話教室とかの広告」(友部・田川, 2008)の氾濫に対して彼は違和感を覚えるのだ(「日本ってすごい変な国」(友部・田川, 2008))。つまり、彼の無境界性感覚は単純なグローバル化ではない。いわば、同一性拡散の地理的具象化なのだ。

最初に論じた友部のデビュー作品「大阪へやっ来て来た」(A)に内包された青年の同一性拡散と地理的彷徨(無境界化)をいわば彼の歌の原風景として、guitarを抱えた詩人は今も旅するのである。その様は、友部が評した「言葉という煙を吐きながら音楽を捨てずに生きてきた」(友部, 2010) Bob Dylanと同型であろう。

引用文献

- American Psychiatric Association 2000 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Fourth edition. Text Revision.* American Psychiatric Association. 高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸(訳)『DSM-4-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル-新訂版-』2002 医学書院
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle.* International Universities Press. 小此木啓吾(訳編)『自我同一性』1973 誠信書房
- Frith, S. 1983 *Sound effects: Youth, leisure, and the politics of rock'n roll.* Constable & Company Ltd. 細川周平・竹田賢一(訳)『サウンドの力-若者・余暇・ロックの政治学-』1991 晶文社
- 福岡健二 2003 抗議とメルヘンの先へ 現代詩手帖(思潮社), 46(4), 54-57.
- 細見和之 2005 『ポップミュージックで社会科』み

すず書房

- Jones, E. E., & Nisbett, R. E. 1971 The actor and the observer: Divergent perceptions of the causes of behavior. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelley, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner(Eds.), *Attribution: Precieving the causes of behavior.* General Learning Press. Pp.79-94.
- 小室 等 2003 《内側》と《外側》 現代詩手帖(思潮社), 46(4), 38-39.
- 増田聡 2006 『聴衆をつくる』青土社
- 松本健一 1981 現代歌謡曲-考 国文学-解釈と鑑賞-(至文堂), 46(3), 65-74.
- 諸井克英 1995 『孤独感に関する社会心理学的研究-原因帰属および対処方略との関係を中心として-』風間書房
- 諸井克英 2006 青年における情熱の沈潜化-「古井戸」が構成した私生活空間- 同志社女子大学生活科学, 41, 27-30.
- 仲井戸麗一 2003 「友部正人」というポエム-友部正人もしくは、友部正人作品に寄せて- 現代詩手帖(思潮社), 46(4), 51-53.
- 小熊英二 2009 『1968〈下〉-叛乱の終焉とその遺産-』新曜社
- 鈴木勝生 1987 『風に吹かれた神々』シンコー・ミュージック
- 友部正人 1992 『The Man In Me-ぼくのなかのディラン-』大栄出版
- 友部正人 2007 a 『ジュークボックスに住む詩人2』思潮社
- 友部正人 2007 b 中原中也, 失われた声 国文学-解釈と教材の研究-(學燈社), 52(12), 68-106.
- 友部正人 2010 ポプ・ディランを探して 現代思想(青土社), 38(6), 19-24.
- 友部正人・長谷川博一 1991 インタビュー シャンソン・ダムール 長谷川博一(編)『Mr.OUTSIDE-わたしがロックを描くとき-』大栄出版 135-159 頁
- 友部正人・田川 律 2008 友部正人インタビューくるり(ビレッジプレス), 2008/2月号, 2-15.
- 友部正人・田口犬男 2003 どこにも属さない-インタビュー「詩・音楽・現在」-現代詩手帖(思潮社), 46(4), 18-29.
- 吉見俊哉 2011 『万博と戦後日本』講談社学術文庫

時代を漂流する青年のころ

〔音源〕

友部正人

A：『大阪へやってきた』 PCCA-50119 〈'72 年〉

B：『にんじん』 PCCA-50120 〈'73 年〉

C：『1976』 TM 003 〈'76 年〉

D：『奇跡の果実』 MDCL-1283 〈'94 年〉

E：『Speak Japanese, American』 MDCL-1471 〈'05 年〉

(2012 年 11 月 9 日受理)